The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	稲場圭信著『利他主義と宗教』
Author(s)	藤本, 頼生
Citation	宗教と社会貢献. 2012, 2(1), p. 69-75
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/19955
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

書評

稲場圭信著

『利他主義と宗教』

弘文堂、2011 年 11 月、B6 判、222 頁、1700 円＋税

藤本頼生*

本書は著者が 2002 年から 2011 年 7 月までに編著書、学術雑誌に発表した論文等をもとに、大幅な加筆修正を施し、新たに書き下ろしを加えて一書としたもので、著者三冊目の単著となり、かつ「宗教の社会貢献」研究の上で待望の書というべきものである。

著者はご存知の通り、本電子ジャーナル『宗教と社会貢献』の編集委員長でもあり、2006 年から 2011 年までの 5 年間、「宗教と社会」学会の会員を中心とした研究者を中心に継続的に研究を続けてきた宗教の社会貢献活動研究プロジェクト（現 :「宗教と社会貢献」研究会）の世話人を務め、2009 年には櫻井義秀北海道大学教授とともに同プロジェクトの研究成果をもとにした『社会貢献する宗教』（世界思想社）を編むなど、利他主義と宗教、宗教と社会貢献活動に関わる研究においては、まさに日本の第一人者ともいうべき研究者でもある。宗教学の研究分野における社会貢献活動の研究については、宗教者や宗教団体の実践活動を伴う問題でもあり、その研究のスタンス、あり方を含め、まだまだ研究蓄積が少ない未開拓の分野ともいえる。そのなかにあって、著者の研究は同様の分野をフィールドとする研究仲間にとって、まさに開拓者、先駆者ともいえる旗頭的な役割を果たしてくれている。そのことは著者が本書のあとがきで「以前はとぼとぼと歩いていた心細い道が、いま活気ある街道になったと感じる」（210 頁）と述べるように、神道と福祉に関わる研究を行っている評者にとっても、著者の研究業績や学会パネルなどでの研究者仲間との研究交流の成果の一つひとつが、暗闇のなかを昼間のような照度の電灯で、進むべき方向はこちらだと一筋の道を指し示してくれているようななんとも心強い存在でもある。

さて、前置きが長くなったが、本書の概要について紹介しておきたい。

本書は、2011 年 3 月 11 日に起った本邦有史以来、最大級かつ未曾有の東日本大震災の直後、避難所として人々の救援拠点となった神社や寺院での

*國學院大學神道文化学部専任講師

対応をはじめ、その後の宗教者、宗教団体の社会的取り組みなど最新の救援・支援活動についての状況も踏まえつつ、著者のこれまでの研究をまとめたものである。著者の研究の原点は、博士論文を一書にした *Altruism in Religious Movements: The Jesus Army and the Friends of the Western Buddhist Order in Britain*（2004）に述べられているが、いわゆる洋書でもあり、研究者であっても改めてじっくり手にとって読むにはなかなか手ごたえのあるものであった。その後出版された著者の２番目の単著である『思いやり格差が日本をダメにする―支え合う社会をつくる８つへのアプローチ―』（2008）では、著者の研究の第一ともいうべき「利他主義」研究を、一般的にも広く用いられている「思いやり」という平易な言葉をキーワードに、社会の人間関係の希薄化や自己の利益のみを考える社会の風潮を「思いやり格差」という造語を用いて述べられている。しかしながら同書は、非常に示唆に富む書であるものの、残念ながら学術論文ではなく、一般向けに説いた書であるがゆえに、専門的な論文等で著者の利他主義、社会貢献活動研究を取り扱いたい、知りたいという研究者にとっては、やや物足りないものであった。その点、本書では筆者がこれまで取り組んできた宗教 NGO の活動や海外の宗教団体の活動事例、宗教者、宗教団体を中心にした利他的活動とその思想についての構造的意味、ソーシャル・キャピタルとしての無自覚の宗教性、宗教の社会貢献の定義や分類について学術論文として書かれたものをベースにしているため、著者の学術研究を一書にして読みたかった諸賢にとっては、洵に喜ばしい限りである。

次に本書の構成は以下の通りである。

まえがき
第一章　東日本大震災と宗教
第二章　宗教的利他主義・社会貢献の可能性
第三章　宗教的利他主義の構造
第四章　無自覚の宗教性と利他主義
第五章　宗教の社会貢献活動に関する文化・歴史的背景と法制度
第六章　グローバル化とシェアすることの意味
終章　　宗教的利他主義のゆくえ
あとがき

参考文献
初出一覧

以上のように、本書は終章を含めた七章からなっている。まず、「まえがき」では、東日本大震災の発生後になされる様々な宗教者、宗教団体等の救援・支援活動を目の当たりにし、宗教の社会貢献、利他主義を研究する研究者として、宗教者、宗教団体、宗教の公益性の有無の観点から、社会に貢献しているか否かを含め、宗教的利他主義の観点から一書をまとめる意義について述べられている。

次に第一章では、東日本大震災における宗教団体の動きについて、震災後、特に大津波の被害を逃れた神社や寺院は一時避難所となり救援の拠点となったことから、キリスト教会での活動も含め、その後の支援の状況について述べられるとともに、宗教者災害支援ネットワークや宗教者災害支援連絡会での動きなど、宗教者・学者の連携の動きや、筆者が阪神・淡路大震災で経験したボランティア活動からの変化について述べられている。

第二章では、著者のまさに真骨頂というべき「宗教的利他主義」について、その元になる自己の利益のためではなく他者のために心遣いをする態度、つまり「利他主義」について述べた上で、宗教的理念に基づいた利他主義、つまり宗教的利他主義は教団の社会的あり方を形作っているとともに、個々の宗教者や信者の生き方、特に他者と社会との関わり方、あるいはその信仰によっていかに救われるかという救済観とも関連するものだとしており、宗教の社会貢献を考える上で、宗教的利他主義が重要であると指摘している。さらには宗教の社会貢献の定義と分類がなされており、今後当該研究を進める上で必ず参照されるべき部分が述べられている。その意味でも本書のまさに肝ともいえる章でもある。

第三章では、筆者が海外の新宗教研究についてもこれまで研究対象としてきたなかで、イギリスの新宗教（The Jesus Army, The Friends of the Western Buddhist Order の二教団）を対象に利他主義を正面から取り上げ、フィールドワークを行った結果をもとにしたもので、信仰生活における利他主義の意味や内容、動機や発達要因などを明らかにしたものである。当事者性に焦点をあてた利他的精神の発達に関する宗教研究はこれまで未開拓の分野でもあり、自己と他者、社会的な関係の再構築という点で、単に宗教社会

学のみならず、社会学の上からも今後注目されるべき分野の研究であるともいえる。自己と他者との関わり、相互作用という点については、近年、社会学の分野から船津衛の『社会的自我論』（2008）や『コミュニケーションと社会心理』(2006)、『現代コミュニティ論』(2006)、『自我の社会学』(2005)などの一連の研究があるが、宗教社会学の分野からは著者の研究が最新のものであるといえよう。

第四章は、「無自覚の宗教性と利他主義」と題し、ソーシャル・キャピタルとしての「宗教」の役割を問う章である。宗教が人と人とのつながりを作り出し、地域コミュニティの基盤となってきたことは、欧米で関心がもたれているばかりではなく、我が国においては歴史的にも社寺が地域社会のつながりを生み出してきたことは、評者の研究でも明らかにしてきた通りであり［藤本 2009］、東日本大震災の発生後、各被災地域で神社や寺院にちなむ神事芸能、伝統芸能の斎行が地域の結びつき、絆の再生を築く上で一役買っている事実からも明らかである［藤本 2011 : 3-7］。さらには近年、黒崎浩行が説く「宗教的文化資源」［黒崎 2011 : 45-58］の活用という観点からも基礎となる論考でもあろう。著者は「思いやり格差社会、評価社会にあって、目に見える宗教とは異なり、無自覚の宗教性は多くの日本人の中に存在する。そして、その無自覚の宗教性は、他者を思いやる利他主義の契機を豊かに含んでいる。欧米型の新自由主義ボランタリズムとは別の志向性、無自覚の宗教性によるボランタリズムがソーシャル・キャピタルの源泉ともなりうる」（129 頁）と指摘した上で、「しかし、それは、見知らぬ他者に対して冷たく、排他的になる可能性もある。普遍的利他主義（橋渡し型ソーシャル・キャピタル）になるか、内部だけで結束し排他主義（結束型ソーシャル・キャピタル）になるか、その要因は何か、今後の課題である」と述べている点は、我が国の従来型の地域社会に存在するボランタリズムの強みと弱点を述べつつ、本書の理論的視座の一部を提示したものであり、今後、欧米型のボランタリズムと日本型ボランタリズムとの差異を明らかにしていくためにも必要な視点となるものであると評者も考えている。まさに本書のポイントであるともいえるのが本章であるといえよう。

次に第五章では、宗教の社会貢献活動に関する文化的・歴史的背景と法制度の問題について、イギリス・フランス・アメリカの慈善活動・社会貢献活動に関する制度と社会的・歴史的背景について述べたもので、その三

国の比較検討の上に、宗教団体の公益性と社会貢献活動の社会的機能について、日本の宗教団体の利他主義と社会貢献活動、NGO 活動の展望がなされている。宗教を母体とする国内の NGO が今後地平を開けるかどうか、活動が認知されてきた一方でその政策提言能力が問われているとする著者の分析にいかに宗教団体が答えうるかが今後問われるところであるといえる。

第六章は第三章ともリンクする論考であり、現代の都市における多民族的な環境・風土、つまりグローバル化の進行に対して、異質な他者をいかに受け入れていくか、という点を欧米での調査・体験をもとに論じたもので、日本にも浸透してきている極めて現代的な問題について述べた章でもある。著者は H・G・ブルーマーの「シンボリック相互作用論」を枕に論を進めており、この点が非常に大事な観点であると考えている。先に紹介した社会学者の船津衛は、いうまでもなく社会心理学者 G・H・ミードの見解を現代に復活させた H・G・ブルーマーが説いた「シンボリック相互作用論」研究の我が国における第一人者でもあるが［船津：1976］、船津の先に述べた書や船津の共編著『21 世紀の社会学』（2005）でも、コミュニティと社会心理の問題や今日の社会学において意味・内的世界の問題、その社会性がクローズ・アップされてきていることを説いている。船津はさらに「他者の目を通じて客観的に自己の内側を振り返ることによってそこに何か新しいものが生み出される」という「創発的内省」［船津 2005：15-17］の解明の必要性も指摘しているが、そうした指摘とも相俟って考えるならば、本章は都市社会のなかでは各々の多様な文化的背景・価値観が自己と他者とのさまざまな衝突を生み出しているなかにあって、あらたな共存のあり方を模索する上で、宗教の役割や意味づけも踏まえ、一体何が必要なのかを考えさせる章でもある。

最後の終章では筆者の説く「宗教的利他主義」の行方について展望する章であり、現代宗教における他者を思いやり行動する人々のつながりについて筆者が分析の概念として提示、命名した「利他行ネットワーク」について、立正佼成会への調査をもとに、一教団としての排他性や閉鎖性を乗り越えて、教団外部の人々へ利他的な倫理観を伝える可能性を示唆している。さらには公共性と宗教の問題や東日本大震災前後の無自覚の宗教性に基づいた「共感縁」の誕生についても指摘しており、現代社会に今求められる命の尊さ、命の教育の大切さ、その根幹にある諸宗教の持つ、利他主

義、他者への思いやりとその実践に関する教え、神仏に対する畏敬の念などが、人を謙虚にし、自分の命や他者の命も尊重する可能性があると説く。その意味でも著者は「宗教の果たせる役割は少なくないはずだ」と述べて、本章を括っていることは、今後の宗教者、宗教団体の活動に対して非常に重い意味を持つと考える。

尚、最後に記されている参考文献の一覧では近年の国内外の宗教と社会貢献研究の動向、海外の宗教と利他主義に関する研究を知る上でも大いに参考となるものでもある。

以上、本書をその構成に基づいて纏めるとともにいささかのコメントも加えながら述べてみた。改組する前の旧「宗教の社会貢献活動研究プロジェクト」で著者と同じく設立時から世話人を務め、著者とは当該分野の研究者としても旧知の仲である評者が本書の書評を執筆することは、いささか気恥ずかしい点も否めないが、あえて重ねて述べておきたい。本書評の冒頭にも指摘したように、本書が世に出る意味の一つとしては、「宗教の社会貢献」研究の上で、まさに待望の書というべきものでもあり、今後、「宗教の社会貢献」研究を行う上では基礎書の一つとなることは間違いないからである。それは単に宗教的利他主義や「宗教の社会貢献」研究の概念構築という、著者がこれまで築き上げてきた学術的意味・意義ばかりでなく、今後も問われ続けるであろう公益法人改革の問題、特に宗教法人の税制面での非課税措置などの問題も含め、宗教そのものの公益性や公共性、あり方を問うという宗教の現代的な意義やその意味を再確認する作業でもあり、ある意味、現代社会からの要請でもある。その点でも個別の宗教・宗派の社会活動、社会貢献活動を研究する上でも繰り返し参照されるべき書でもある。当該分野の宗教研究者のみならず、是非とも多くの方々に一読戴きたいと願うものである。

参考文献

稲場圭信 2004 *Altruism in Religious Movements: The Jesus Army and the Friends of the Western Buddhist Order in Britain*. 大学教育出版。

――― 2008 『思いやり格差が日本をダメにする―支え合う社会をつくる８つへのアプローチ―』NHK 出版。

船津　衛 1976 『シンボリック相互作用論』恒星社厚生閣。

――――― 2005 『自我の社会学』放送大学教育振興会。
――――― 2006 『コミュニケーションと社会心理』北樹出版。
――――― 2008 『社会的自我論』放送大学教育振興会。
船津衛・山田真茂留・浅川達人編 2005 『21 世紀の社会学』放送大学教育振興会。
船津衛・浅川達人編 2006 『現代コミュニティ論』放送大学教育振興会。
藤本頼生 2009 『神道と社会事業の近代史』弘文堂。
――――― 2011 「東日本大震災と神社・神職」『国際宗教研究所ニュースレター』№. 71（11-2）国際宗教研究所。
黒崎浩行 2011 「宗教文化資源としての地域神社―そのコンテクストの現在」国際宗教研究所編『現代宗教 2011』秋山書店。